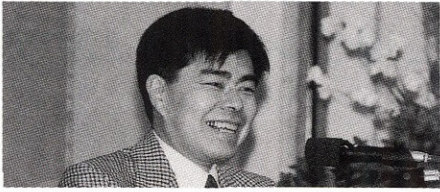


最年少受賞！

中島秀人助教授が「大佛次郎賞」を受賞



『鞍馬天狗』や『天皇の世紀』など幅広い著作活動で知られた小説家大佛次郎を記念して1974年に朝日新聞社が創設した「大佛次郎賞」の贈呈式が1月30日、帝国ホテルで行われた。歴史と文明の批評として質の高い散文に毎年贈られる同賞受賞者に本学社会理工学研究科所属の中島秀人助教授が選ばれた。同賞史上最年少、41歳の中島氏の受賞作は『ロバート・フック ニュートンに消された男』（朝日新聞社）。フックの法則で一般には知られるに過ぎない17世紀イギリスの科学者の再評価を目指した評伝である。8分といわれたところを2分におよんだスピーチで氏は、賞を科学技術史という分野にいただいたものと考えたいといいつつ、昨今「学術的研究」に縮こまりがちなの自分たちの分野の現状に苦言を呈した。



受賞パーティでの中島助教授(左)と伊賀教授(右)

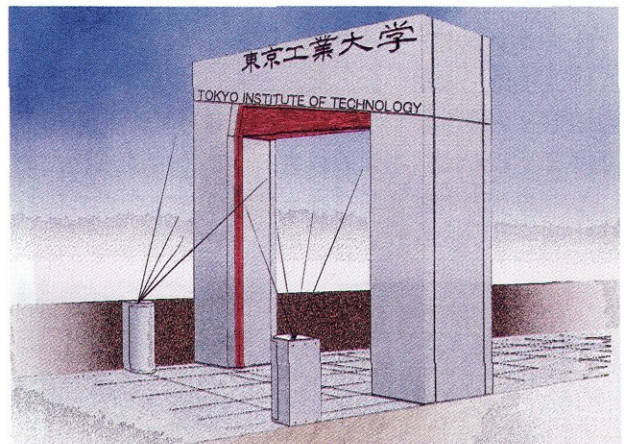
科学史・技術史には、学問と社会の狭間であって後継の若手を科学・技術にいざないながらも科学・技術に建設的な批判をなげかけ、ひいては科学技術文明の方向性を示すぐらいの気構えが必要と訴えた。中島氏ら若手の研究者を中心にこの3月には科学・技術・社会論（STS）の国際会議が日本で開かれる。その宣伝をしっかりおりませた授賞式のスピーチに東工大の新たな知的発信源の誕生を見るのは身びいきに過ぎるだろうか。

（文責：大学院社会理工学研究科 梶 雅範）

「すずかけ道路」に門が設置される

長津田キャンパスの「すずかけ道路」（通称「すずかけ通り」ともいう。）は、昭和50年の移転時から、田園都市線利用の通勤・通学者にとっては重要な通り道で、現在ではほとんどの人が利用しており、このキャンパスの事実上の正門（長津田門が正門＝車が入れる門）といっても過言ではない状態である。

昭和50年9月、総合研究館棟及び精密研究所棟が最初に完成して研究室等が移転したが、そのころの「すずかけ道路」は造成の途中でもあったことから、国道246号線の下を進んだ最初の階段から公用掲示板のある守衛所の前まで深い谷になっており、板と筵とから成る150段余りの階段で、まさに心臓破りの道ともいわれ、特に冬場は凍結がひどく滑る者もあった。その後、仮り舗装がなされたが雑草が繁茂し痴漢の出没の噂もされたほどである。



その後、道幅が多少広げられ、周りの地主の方々のご好意もあって視界が広がったものの、環境は必ずしも良くなく、この道路を利用する人々に「裏通り」的な感覚を与えていた。また、移転当時に比べ生命理工学部等の部局も増え、それらに伴って学生数も格段に増加（その中でも特に女子学生が著しい）するとともに、外国人の来客等も多くなったことも相俟って、学内外から環境が余りにも貧弱であるといった意見も聞かれ、その環境整備の充実について検討がなされていたが、財政的な事情等もあり長年の懸案となっていた。

この度、経理部、施設部等事務局の多大なるご協力により、すずかけ道路の整備の一環として、入り口近くに、建築課のデザインによるステンレス製の立